

第1分科会

子どもたちの放課後の世界を広げよう！ ～児童館と児童クラブの連携を通して～

概要

各児童館・児童クラブにおける交流連携事業の取り組みの現状について話し合い、交流の成功や困難の要因を探りました。そして最後にみんなで「おすすめ交流モデルプログラム」を作成しました。

講師

佐藤 晃子さん

(厚生労働省子ども家庭局子育て支援課健全育成推進室
児童健全育成専門官)

野澤 秀之さん

(一般財団法人児童健全育成推進財団第三者評価室長)



佐藤 晃子さん



野澤 秀之さん

分科会内容

【第1日目】

1. 行政説明

「児童館及び放課後児童クラブの現状」

厚生労働省子ども家庭局子育て支援課

佐藤晃子さん

- ・連携をすることによって子どもたちの活動をより豊かにすることができます。
- ・館とクラブのやり方はそれぞれ違うので、児童館ガイドラインと放課後児童クラブの運営指針を見比べることによってお互いわかりやすくなるので、十分に目を通してほしいです。

2. 実践発表

- (1) 児童館と地域児童クラブとの連携「3館合同運動会」(福井市和田児童クラブ)
- (2) 児童館同士の連携「夏休みの交流会」「秋の合同遠足」(福井市すずらん児童館)
- (3) 児童館内の一般児童と放課後児童の関わり「子どものための防災訓練」「高校生によるサッカー教室」(福井市ひまわり児童館)「地域とつながっちゃオ作戦」(福井市くるみ児童館)「トーンチャイムでつながろう」(福井市もみじ児童館)

3. グループ協議

- (1) アイスブレイク
「積み木しりとり自己紹介」
- (2) 交流連携事業で、やっていること・困っていることを出し合い、交流連携事業の成功の要因を探っています。
 - ・近隣の児童クラブと合同ミニ運動会を行っています。
 - ・読み聞かせや折り紙指導などで地域の人と交流を持っています。

- ・地域のイベント参加や、老人施設の訪問などを行っています。
- ・大型児童館では職員同士の交流のみ行っています。
- ・支援が必要な子が通っている児童クラブとの交流も望んでいるが時間の取り方が難しいのが現状。野菜を一緒に育てるなどの交流が考えられます。
- ・各県によって開館時間や運営体系が違ってきます。中高校生が来館する館があるのが良いです。
- ・児童館の位置が違うので移動が困難なことから、館によってルールが違うことが交流の難しさを引き起こしています。



【第2日目】

1. グループ協議

- (1) やってみたい交流事業を挙げました。(ブレインストーミング)
- (2) 「おすすめモデルプログラム」の作成
「ごちゃまぜまつり」子どもが考え参画するコーナー、民生委員、母親クラブのブースもあります。
「児童館、児童クラブだけじゃない全国大会」地域の方、異業種の方にも呼びかけ子どものために働いている姿を見てもらいます。
「ものづくり交流」中学校区内の館やクラブが一緒に何か作ります。(例：カレー作りのためのじゃがいも栽培)
「全国こどもサミット」子どもたちが活動報告をして一緒にハピネスダンスを踊ります。

「今日は中・高生」中学生や高校生と一緒に登校し学校探検し一緒にお弁当を食べます。

「あそびにいこさ」児童館・児童クラブフェスタ。児童館とクラブの定期打ち合わせの会を設け、一年間かけて事業計画を話し合います。

「昔の子どもたちも集まれ！」地域のお年寄りにぶらっと児童館に立ち寄ってもらい、お茶飲み、おしゃべり、将棋指しをしたりして、子どもたちの様子を見てもらいます。

「今は自然だあー。」山に行つてのこぎりを使ったり、木の実を集めたり、穴を掘ったりする。

2. 講評

佐藤さん：いろいろな発想が出ておもしろいと思いました。働いている場所や勤務体系が違う中で交流やできることがそれぞれ違うが、できることから始めてほしい。イベント主体になりがちですが日々の中で子ども主体にしていくことが大切です。子どもがやりたいことを大人と一緒にしていくという基本を忘れてはいけません。今日この会で話し合ったことを職場に持ち帰って伝達してほしいと思います。「子どものために」という気持ちがあふれる分科会でした。

野澤さん：確実にできそうなものや前衛的なアイデアもあり、興味深かったです。各館の状況も条件も違うけれどアイデアを出してみよう、夢を語り合おうというのは、バックキャスト思考です。思いっきりアイデアをとばして、そこに行くにはどうしたらよいかを考えた方がうまくいくものです。各グループの司会者の方の話の引き出し方がとても良かったです。現場で子どもたちに対する接し方と同じだと思えます。最後に2つのことを心に留めておいてください。①皆さんの地域で子ども達のために本音で語り合えるコミュニティを持ってください。②児童館の方もクラブの方も児童館ガイドラインを読み込んでください。子どもに関わりのある地域の方にも知ってほしいです。最後にワークショップを一つ。現場に戻って何をするかのBaby stepを各グループで宣言してください。



参加者数

1日目45名／2日目32名

参加者の声

- ・全国の仲間からたくさんのことを教えていただきました。澆刺として積極的に意見を言われる姿に私も子どものためにがんばらなくてはと強く感じました。
- ・いろいろな考え方をまとめていくことの重要性和難しさ、それを達成した時の充実感を感じることでできる分科会でした。
- ・今までやってきた交流事業を見直していく必要性を強く感じました。子どもの自主性は毎日の暮らしの中で育つと再認識しました。

担当者の声

会場が狭いうえに、1日目は十分に話し合っていたく時間がとれず申し訳ない思いがありました。2日目の「おすすめモデルプログラム作り」では、前日の意見交換を活かして、各班ともすばらしいアイデアを楽しんで出し合っている様子が見られたことは、分科会担当としてこの上ない喜びでした。参加者全員が熱心に意見を発表し、よりよい大会にしようという強い気持ちが伝わってきて感動しました。企画委員としてお手伝いできたこと、全国の方々の視点の違いを知ることができたこと、目的は子どものためという共通認識が一致していることがわかったことがとても良かったです。

企画委員

齋藤 常夫（福井市もくせい児童館）
長谷川 和子（福井市さつきじょうかん）
小林 清直（福井市とちのき児童館）
筆島 幸枝（福井市とまと児童館）
八杉 藤志美（福井市くすのき児童館）
吉岡 眞代（福井市あさがお児童館）
渡邊 敦子（福井市くるみ児童館）
中村 浩美（福井市和田児童クラブ）
南 智仁（福井市社児童クラブ）
田村 祐紀恵（福井市社会福祉協議会）



第2分科会

職員の関わりを振り返る！

～マルトリートメントの視点を頼りに～

概要

「マルトリートメント」（不適切な関わり）の言葉をキーワードに、身近な事例を通して「より良い関わりとは何か」を考えていきました。職員の創造力や勇気が、子どもだけでなく親御さんも救うことになるということに気づかされました。

講師

榊原 信子さん

(福井大学医学部附属病院子どものこころ診療部臨床心理士)



榊原 信子さん

分科会内容

【第1日目】

1. 講師講演

子育ての実態として、知らず知らずに「マル＝不適切」「トリートメント＝関わり方」をしている親が増えているということがあります。親自身がほめられたことがなく、ほめ方がわからないので叱責したり、無視したりということになるからです。これでは、親も子ども自己肯定感が育ちません。しかも、子どものデリケートな脳は極度のストレスを感じると、その苦しみから逃れようと脳が自ら変形してしまう！ということがわかってきました。強い体罰はもちろん心理的マルトリートメントやネグレクトでも、脳にダメージがあります。意外なのは、身体的暴力よりも怒声や暴言の方が、より子どもの脳に深刻な影響を与えることです。このことを重く受け止めるべきです。子どもに寄り添うとは、ほめられてないかもと想像・関わり方のモデルを見せる・少しでも出来たらほめることで自己肯定感を育むことです。また、子どもの気掛かりな様子の背景には親があり、その親に寄り添うことも大事です。寄り添うとは、

まずこの親があまり認められることがなく自己肯定感が育っていないのではないかなど想像を働かせることです。



2. グループディスカッション

事例をスタッフが福井弁で再現

(1)事例1（遊びを次々と変え、いつも注意を受けている子と職員のやりとり）

不適切な個所の指摘をすることで、どんなことが問題になるか話し合いました。この事例の場合は兄弟と比べることで、人格否定や自分ばかりという言葉から不平等感を持っていることなどが想像できました。そのうえで、職員としてはどのようにしていくとよいかを話し合いました。



(2)事例2（思春期に向かい自我の芽生えがある子どもと親・職員のやりとり）

身体の不調を訴える子どもの心にどこまで寄り添えるかということと、頑張らせようとする親の言動に何があるかを想像してみました。親自身が認められたい欲求があることを想像できると、まず親の頑張りをほめて認めることで、子どものしんどさに気づかせるきっかけになります。

3. 講師まとめ（1日目）

親自身が不適切に育てられていて、経験不足だとマルトリートメントになりがちです。そのことを理解していない親が多いです。我々は、相手の辛さに気づくのが大事で、今できていることを一

緒に見つけてたくさんほめて、良き相談者になれるとよいです。相手には、やり方がわからないだけで、あなたのせいじゃないことを伝え、具体的な対応を一緒に考えて、出来た結果を一緒に共有できると自己肯定感を育むチャンスになります。



【第2日目】

1. 講師講演（1日目の振り返り+）

最近の特徴として、スマホネグレクト・スマホ育児があります。コミュニケーションツールとして、利用するのならまだしも、結果的に保護の怠慢や養育放棄につながることもあるので要注意です。自己肯定感の基礎には、愛着（アタッチメント）が大事です。この愛着が不足した子どもは脳活動が活発ではありません。このような子どもにはより以上にほめることが必要です。ほめるには準備がいります。事前ルールがあるか？状況に気づいているか？やり方がわかるか？など行動に注目するとよいです。ほめるポイントとしては、ほめる・無視・罰を使い分けること。子どもの気持ち・行動を言語化してみる。量や時間を具体的にすること。役割を与えることなどがあります。昨今、ルールが曖昧な家庭が増えていると感じられます。自己管理は難しいですが、交渉する力を育てるチャンスでもあります。

2. グループディスカッション

(1)事例3（友だちのちょっかいにキレてやつあたりで自分のものを壊した子と親・職員のやりとり）

親の困り感を受け止めきれないことで、良き相談相手になっていないことが問題です。



「どうしたらいいんでしょうね？」のような言葉は、困り感を引き出すチャンスです。

(2)事例4（明らかなマルトリートメントな会話をする親子のやりとり）

親自身にマルトリートメントの自覚が必要ですが、やはり親の悩みを共有して一緒に考えたり、

子どもの良いところを伝えたり、良いモデルを見せることで気づきのチャンスをつくります。

3. 講師まとめ（2日目）

児童館が出来ることとしては、想像を働かせ、子・親・家族の気持ちの理解を深め、少しの勇気でもう一歩を踏み込んで安心感・安全感を与える場所になるよう努めることです。日頃から、仲間の職員をほめ、自分自身をほめて、職務を遂行して欲しいです。

参加者数

1日目49名／2日目48名

参加者の声

- ・全国の児童館の皆さんの意識の高さが感じられました。子ども・親御さんそれぞれに対する対応の仕方がなるほどと納得させられる話や意見がたくさん聞けて有意義でした。
- ・マルトリートメントが何かを知ることが出来ました。もっと知識を深めたいと思いました。
- ・他県の方々と意見交換ができ、保護者対応のいろいろな経験談を聞けて楽しかったです。
- ・どの県の方々も、専門職としての誇りをもって、子どもにも、親御さんにも真摯に向き合っておられる姿勢に感動をおぼえました。
- ・日々悩んでいるのは、自分たちだけじゃないとわかって、勇気と元気をもらえた気がします。

担当者感想

子どもの脳に影響が出る！マルトリートメント。これは、ただならぬことだという思いから掲げたテーマでした。この知識を少しでも多くの方に拡散できたのなら幸いです。本分科会の担当スタッフは、大会運営など初めて経験するものばかりで、いたらないことが多くありましたが、全国から来られた皆さんの温かいまなざしと子どもたち・親御さんたちを支えたいという気持ちは同じだという熱い思いに助けられ2日間を無事終えることが出来ました。参加してくださった皆さんに心から感謝します。

企画委員

武川 ひろみ（坂井市坂井木部児童館）
下田 美穂子（坂井市池上児童館）
桑野 佳世（坂井市春江児童館）
中嶋 智恵（坂井市兵庫児童館）
川畑 久美子（坂井市城北児童館）
出店 理成（坂井市子育て支援課）

第3分科会

五感に響け！ ～パコーンの魅力まるごと体感～

概 要

「パコーン」とは五感で楽しむ紙管を使った打楽器です。絵・文字が下手でも誰でも簡単に作れます。地域の資源を活用した子どもたちの豊かな感性を育てる体験活動の一つとして一緒にパコーンの可能性を探りました。

講 師

山内 廣志さん

(有限会社プランニングヤマコウ代表)



山内 廣志さん

分科会内容

1. グループ分け

受付で各自くじを引き8つのグループに分けられました(1グループ4名～5名)。

2. 講師からパコーンの説明

- ・パコーンは紙管でできています(叩く部分は木)。
- ・幼児からお年寄りの方まで誰でも簡単に叩ける打楽器です。



3. パコーン作り開始(教室中央で実演も混じえながら)

(1)和紙(20cm×20cm)に墨(筆の代わりにダンボール片を使う)で一文字書きました。

＊書く文字を何にしようか悩むので、今回は「名前の一番最初の文字を書きましょう」と言われました。

(好きな文字を書いてもOK)

(2)講師が各グループを回り、水スプレーをかけて文字を滲ませたり、朱色の墨を垂らしたりしました。

(何もしない場合もある。)

(3)和紙をアイロンで乾かしました。

(アイロンをかける前にキッチンペーパーで墨で濡れている部分を押さえておきます。)



(4)和紙の裏面に糊を刷毛で塗りパコーンに貼りました。

(張り方は自由です。)



(5)貼った和紙の空気を抜いたり、上下にはみ出した部分はダーツを作って折り返したり、切ったりしました。

(6)ドライヤーで和紙の部分が真っ白になるまで

しっかり乾かしました。

(7)和紙を貼った時に、はみ出した糊をウェットティッシュで綺麗に拭き取りました。



⑧自由に色付け、飾り付け各自、自由にパステル・ラメ・ネイル等で装飾しました。

4. みんなで叩いてみましょう

- ・講師の指導の下、パコーンを叩き音の確認しました。
- ・簡単な音遊びをしました。
- ・「どんぐりころころ」の歌を歌いながら、歌に合わせてパコーンを叩いてみました。

参加者数

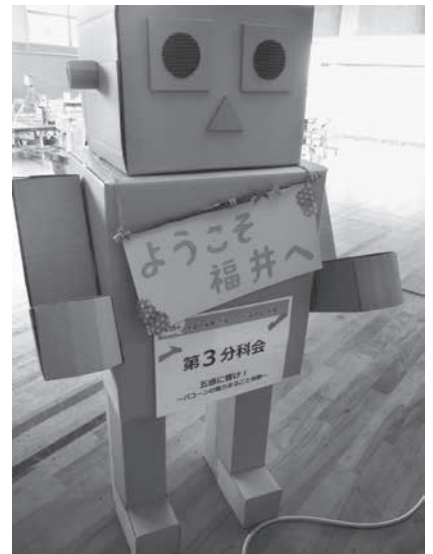
1日目37名／2日目28名

参加者の声

- ・「失敗はない」という製作でしたので安心して取り組みだし、子どもたちにも作る楽しさ、楽器としても楽しめる事を伝えたいです。
- ・段ボールを使って文字を書くのがとても斬新でアートだなあと感じました。
- ・すごく楽しかったです。児童館で子どもたちと一緒に作ってみると楽しいじゃないかと思います。絵を描いたり色を塗ったりと手の作業をさせるのは楽しめると感じます。
- ・気取らず考え過ぎず思いのまま作れたので気持ち良く出来てとても楽しかったです。歌に合わせて叩けたのも良かったです。
- ・演奏の部分をもう少し行って欲しかったです。

担当者感想

全国大会の分科会を担当することになり、職員で何度も話し合いを重ねました。悩んだ事も多かったのですが、当日は、さすが児童館職員の参加ということもあり、ブレーカーが落ちるといったトラブルもありましたがスムーズに和気藹々とパコーンの製作が出来たように思います。色々な工夫も見られオリジナルパコーンが65個も出来ました。全国の児童館・児童クラブの活動で利用していただけたら嬉しく思います。



企画委員

幅岸清美（大野市児童館）

江端亜由美・今井智子（大野市西部児童センター）

大川貴美代（大野市南部児童センター）

泉脇真由子・宝居貴子（大野市東部児童センター）

高村重美（大野市北部児童センター）

松田美保（大野市和泉児童センター）

第4分科会

現代の子どもとの関わり方 ～私たちにできる声かけ～

概要

子どもに関わる専門職として、自らの言動を振り返り、子どもたちの視点に立ってできる声かけやコミュニケーションの取り方を見つけ、子どものことや自分自身のことをもっと知り、自分に必要なことは何かを、グループワークや講師の助言を通して学びました。

講師

吉弘 淳一さん

(福井県立大学看護福祉学部社会福祉学科 准教授)

講義1日目 吉弘さん



分科会内容

【第1日目】

1. グループワーク

意見交換したいテーマについて、参加者が事例などを持ち寄り、問題点や対応例、声かけなどについて意見交換を行いました。

- ・暴言・暴力の気になる子グループ 3グループ
- ・甘える子グループ 1グループ
- ・話を聞けない子、じっとしてられない子グループ 2グループ
- ・ルールを守れない子グループ 2グループ



2. 講義

福井県立大学看護福祉学部社会福祉学科

准教授 吉弘 淳一さん

【私たちにできる声かけ
ーネガティブからポジティブへー】

(1)子どもの話を上手に聞くための4つの視点

(専門職としての自分を明確に。⇔ 親の目線)

- ①子どもの発達を理解しながら、それに合った関わり方等を考える。
- ②子どもの自己肯定感が高くなれば、やる気・意欲も高くなる。
子どもの周囲にいる人は声かけや関わり方を工夫する。
- ③子どもの考える力が育つと、我慢する力が育



まれると同時に、個々の目標に向かう選択肢が増え、可能性が高くなる。

- ④親の性格の把握、生き様を自己一致させながらストレスマネジメントを行う。

※子どもの話を聞いてあげる心の余裕と許容量を広げる。

(2)より良い人と人とのつながりのポイント

- ①親の過干渉、過保護の意味…子どもに失敗をさせないように先回りをしない。

- ②環境を変えると、今の状況も変わる…基本は、相手に余裕を持たせて今をプラスに変化させながらモチベーションを上げていく。

親の価値観：～しないといけない。

→ するに越したことはない。

カラーセラピー：家の中の配色位置を変えてみる。

- ③どのように子どもが悩むのかを観て、聞いてみる。

・先手を打ちすぎない。(子どもができそうなことは、待って見守る。)

・小学校2年までは質問があったら答え、小学校3年生からは質問に答えない。

- ④できないことをさせるより、できることを更に伸ばす。

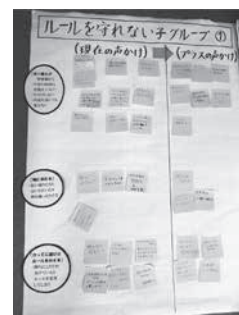
- ⑤一緒に～をする。

…せざるを得なくなる。

- ⑥アイメッセージで伝える。

…「～してくれたら嬉しいなあ」に変える。

- ⑦褒めると叱ることの、発達における2つの視点を持つ。



幼児期：「いい子だね」「偉いね」「すごいね」
「よくできたね」

児童期以降：結果ではなく、過程と子どもの
努力、足跡を言葉で褒める。

⑧子どもが今やっていることを、親の価値観で
やめさせたいときの方法

…子どもに、何らかの余裕を持たせて、子ども
自身が納得してやめることが大切。無理にや
めさせると負の強化で関係悪化

⑨達成感の30分以内に、しっかりと自己肯定感
を親が育む。

⑩子どもの言動の意味を、子どもに伝えること
が大切

⑪やめたい発言には、「何で?」「どうして?」を
言わないで、まずは子どもの気持ちにより添
う。

⑫マイナスの言葉を、プラスに変えてみる。
(ポジティブシンキング 言葉)

⑬「しっかり」「きっちり」「なんで」「どうして」
「いつも」「絶対」「前も・・・」は使わない。子
どもの言動を引き起こした気持ちに寄り添い
共感してあげる。

⑭楽しさ、わくわくさ等が実感できると達成感
に繋がりやすい。やる気の誘導（わかると楽
しい、知ると楽しい等）と、やりたいことの
選択肢を広げてあげる。

・学校の先生との連携は重要。児童館・児童ク
ラブは学校と同じ場所であると意識付けさせ
ることは必要

…など、盛りだくさんで興味深い内容の講義で
あり、もっと聴講したいという受講者の皆さ
んの雰囲気を感じました。

3. グループワーク

各グループからの発表と質問に対し、前日の講義
にもあった内容に加え、更に踏み込んだ内容もそれ
ぞれのケースに当てはめて、具体的に吉弘先生から
回答やアドバイスをし
ていただきました。

最後に、エゴグラム
の判定結果に関して、
専門職としての適性や
気をつけるべき点を説
明していただき、分科
会を終了しました。



【第2日目】

各グループからの発表と質問に対し、前日の講義
にもあった内容に加え、更に踏み込んだ内容もそれ
ぞれのケースに当てはめて、具体的に吉弘先生から
回答やアドバイスをしていただきました。

最後に、エゴグラ
ムの判定結果に関し
て、専門職としての
適正や気をつけるべ
き点を説明していた
だき、分科会を終了
しました。



参加者数

1日目58名／2日目58名

参加者の声

- ・1日目に行われたグループでの情報交換では、か
なり活発に意見が出されたと思います。その後の
講師による講義では、隣席の聴講者との疑似体験
などを取り入れながら、分科会のテーマである“声
かけ”について、とても楽しくわかりやすく学ぶこ
とができました。
- ・2日目の質疑応答での講師の親身なアドバイスや
意見は、私たちにとってとても有意義なものであ
り、今後もこのような機会があれば是非参加した
いです。
- ・来年も参加したいです。
- ・分科会でのグループ討議を期待して参加したが、
場所の移動もあって十分な時間が無く残念でした。

担当者感想

意義のある分科会の実施を目標に、鋭意準備を重
ねて当日を迎えました。意見交換が活発に行われ、
1日目、2日目ともに時間が足りなくなるほど、と
ても盛り上がりました。

講師の講義や質疑応答は、丁寧かつ隣席の参加者
との疑似体験などを交えた楽しくて非常にわかりや
すいものであり、これからの児童館場生かすことが
できる内容であったと思います。

企画委員

中道 弘美（勝山市児童センター）
瀧本 有紀（勝山市成器西児童教室）
吉田 縁（勝山市村岡児童教室）
佐々木 寿代（勝山市北郷児童教室）
齋藤 幸恵（勝山市成器南児童教室）
大久保 美由紀（永平寺町松岡児童館）
和田育実・清水千恵美（永平寺町志比児童館）
田原 喜代美（永平寺町上志比児童館）
黒川 浩徳（永平寺町子育て支援課）

第5分科会

あそびを通して健全育成 ～いろいろあるさあー あそビュッフェ～

概要

子どもたちが楽しい、もっと遊びたいという気持ちが沸き出てくるようにするために、何が大切なのか、どのような支援が必要なのかを考え、皆さんと一緒に遊びを作り出す面白さを体感しました。

講師

海道 洋子さん

(仁愛短期大学非常勤講師)



海道 洋子さん

分科会内容

【第1日目】

1. 講師講演

『遊びをつくる 生活をつくる』のテーマで講師海道洋子さんからお話をいただきました。

児童館・児童クラブは、学校でもない家庭でもない第2の家として子どもたちが自由で、ありのままにいられる場所であること。自由の中にも約束を守り自分から遊びを選択したり、あそびを作り出して楽しんでいけるように、職員は子どもたちの気持ちを受け止めながらあそびの空間や環境を整えたり、子ども一人ひとりに適切な支援をしていくことが大切と述べられました。

2. グループワーク

あそびの提案『からだを使ってあそぼっさ！』

- (1) 8グループに分かれて、各自が道具を使わずただけを使う遊びを考えました。
- (2) グループ内で各自、自己紹介とあそびの提案を発表しました。
- (3) 各グループで、一押しをあそびを1つ決めました。
- (4) 決定した一押しの遊びを各グループが発表する。
- (5) 8つのあそびの提案から参加者全員で、更に一押しをあそびを1つ決めました。

- ・ダルマさんの休日
- ・ジャンケン鬼ごっこ
- ・だるまさんとあそんだ
- ・鬼ごっこ春夏秋冬
- ・言うこと一緒 やること一緒
- ・くつつき鬼



- ・手あそび パッパンパンパンキン
- ・ゾンビ鬼

★一押しは、『言うこと一緒 やること一緒』

1票差の『くつつき鬼』も決定！！

各グループからの発表と質問に対し、前日の講義にもあった内容に加え、更に踏み込んだ内容もそれぞれのケースに当てはめて、具体的に吉弘先生から回答やアドバイスをしていただきました。

最後に、エゴグラムの判定結果に関して、専門職としての適性や気をつけるべき点を説明していただき、分科会を終了しました。

【第2日目】

1. 遊びを楽しもう

1日目のグループワーク『あそびの提案』で、一押し・二押しの遊びを参加者全員で楽しみました。

- (1) 『言うこと一緒 やること一緒』

言う人（指示する人）を一人決め、やる人（遊ぶ人）は数人のグループに分かれて円になり手をつなぎました。

*あそびの説明では、言う人を「先生」、やる人を「子」で表現しました。

先生の指示（言うこと一緒＝言葉）（やること一緒＝動作）に従って、子は言葉を言いながら動作（ジャンプ）も同時に行いました。



例1：言うこと一緒 やること一緒

先生：「言うこと一緒」と言った後、

子：「言うこと一緒」と言葉を返す

先生：「やること一緒」と言った後、

子：「やること一緒」と言葉を返す
 先生：「右」
 子：「右」と言いながら右側にジャンプする。
 先生：「左」
 子：「左」と言いながら左側にジャンプする。

＊同様に先生は「前」「後」の指示もする。

例2：先生：言うこと一緒 やること反対
 「前」⇒ 子：「前」と言いながら後へジャンプする。

例3：先生：言うこと反対 やること反対
 「後」⇒ 子：「前」と言いながら前へジャンプする。

例4：先生：言うこと反対 やること一緒
 「右」⇒ 子：「左」と言いながら右にジャンプする。

以上のように先生は、「言うこと」と「やること」の言葉を変えていく。

(2)『くつつきおに』

鬼2名、逃げる人2名を決めました。他の人は3人ずつ横並びになり互いに腕を組みました。鬼は逃げる人を追いかけてきました。

逃げる人は、鬼から逃げながら3人グループの端（左右どちらか）にくつつきました。

くつつかれた反対側の人がグループから離れて逃げる人になりました。（右側であれば左側の人か、左側であれば右側の人か）。



逃げる人は、他のグループにくつつくまでに鬼にタッチされたら鬼を交代しました。

＊鬼の人に目印をすると区別が付きやすかったです。

2. ～いろいろあるぞあそびビュッフェ～

クラフトコーナーと遊びコーナーを設定し、準備された遊びを体験していただきました。

(1)クラフトコーナー

- ・紙皿カーリング ・とび出せ！ロケット
- ・牛乳パックのびっくり箱 ・CDこま
- ・アルミ虫 ・ぐるぐるタワーリング
- ・しゅりけんハンドスピナー
- ・1年カレンダー
- ・偏光万華鏡

＊製作の材料と作り方を参加者全員に配布する。



(2)あそびコーナー

- ・カロム、オニム
- ・ワーリング
- ・マンカラ
- ・ふくわらい
- ・動物、恐竜将棋



参加者数

1日目55名／2日目66名

参加者の声

- ・グループワークでのカニのくじ引きが、面白い！ドキドキした！
- ・クラフト制作では、偏光万華鏡の模様と色の変化に驚いた。また、紙皿カーリングがとても面白く、あそび方も工夫しだいで発展させていけると思いました。
- ・遊びのカロム、オニムコーナーでは、『やったー！オー！よし！』などの歓声が上がり盛り上がりました。
- ・遊びの提案では、参加する側と見学する側と半分に分かれたことで遊びの内容がよく理解できました。明日早速やってみようと思います。
- ・パネル展示など予算が少ない中このようなアイデアを見せてもらい勉強になりました。
- ・講演やグループワークでの遊びの提案、クラフト制作など盛りだくさんの内容があって楽しかったです。

担当者感想

2日間にわたっての集団あそび、クラフトや遊具を使っのあそびなどつるつるいっばいのあそびを自ら体験することで、私たち職員はあそびの空間を整え、遊びやすい環境や雰囲気作りに心がけながらあそびの大切さを伝えていくことが大事なのだと皆様と一緒に学ぶことができました。それぞれの現場であそびの内容や遊び方など子どもたちとの関わりの中で、さらに工夫をプラスして活用していただければと思います。

企画委員

中川 利晴（鯖江市曲木児童センター）
 川西千鶴（鯖江市水落児童館）
 山岸 純子（鯖江市平井児童センター）
 福岡 裕子（鯖江市有定児童センター）
 鈴木 優花（鯖江市石田児童センター）
 市原 実千代（鯖江市新横江児童センター）
 上野 正枝（越前町朝日児童センター）
 田邊 香織（越前町宮崎児童館）

第6分科会

自己肯定感を高めよう

～あなたは子どもにとって意味のある大人ですか～

概要

自己肯定感とは、どのようなものか。自己肯定感が子どもの発達にどのような影響があるのか。私たちの自己肯定感を高め、子どもに伝えるヒントを見つけ、子どもの自己肯定感を育むために私たちスタッフや児童館でできることは何かをみんなで語り合いました。

講師

伊藤 美奈子さん

(奈良女子大学研究員教授)



伊藤 美奈子さん

分科会内容

1. はじめに(講師より)

全国から集まったみんなとの出会い、つながりがとても大切です。この分科会で知り合ったことを成果として持って帰ってほしいです。

2. 心理臨床の現場から

自尊感情・自己肯定感は、不登校、いじめ、虐待、発達的にかたよりのある子、貧困など問題を抱えている子が低くなることが多いです。一方的な暴力・暴言を受けたり、しかられ続けると、自分は生まれなければよかったとかダメな人間だと思いつつ自分を下げていきます。様々なものを抱えている問題を子どもたちの力で解決するのは大変です。学校でも家庭でも居場所をなくした子どもがどんどん自己肯定感や自尊感情が低くなっています。どこかに居場所があったら救われます。



3. グループディスカッション①

具体的にどんな子が自己肯定感が高い、低い？

* 高い子・・・思いやり・自己主張・愛されている・大事にされている・社会経験・失敗をひきずらない・けんかをして謝れる・自慢しない・お手伝いできる・いつも楽しそうな子・人の意見を聞ける子・こだわりがない(なんでも受け入れられる)・リーダーシップ・自分を大切にする・輪に入れる・自分の意見が言える・あきらめない・ありがとう、ごめんなさいが自然に言える等



* 低い子・・・声が小さい・めんどくさがる・人と比べる・人の言いなりになる・親に相手にされない等

4. 自尊感情尺度を図る

参加者の自尊感情測定尺度 A 自己評価・自己受容、B 関係の中での自己(関係の中での自信)、C 自己主張・自己決定の3因子からなっている自己評価シートの記入を行いました。また、子どもたちの理解のため特定の気になる子どもになったつもりで自己評価シートの記入も行いました。

5. 思春期の特徴

思春期は自己意識と他者意識が高まります。現実と根差した夢や理想が見られるようになり現実とのギャップを感じます。そのため自己肯定感は下がる傾向にありますが、自分を見つめる力や想像できる力が付くということが成長している証拠です。

6. 自己肯定感との関係要因

学校適応が来ている子は自尊感情が高いです。親に愛されている子、大事にされている子も高いです。不登校気分・イライラして落ち着かない・くよくよ情緒面の不安がある子は低いです。自己肯定感は周りの環境・経験によって良くも悪くもなります。自分で上げようと思っても自分では上げられません。

7. グループディスカッション②

自己肯定感を高めるにはどんな方法がある？

* 話を聞く ゆっくりと 否定しないで最後まで喧嘩した子はお互いのケア

* ほめる さりげなく 無意識の行動を 直接・間接的にも 存在を認める

* 声をかける 見ているよと伝える 一人ひとり

に できてるよと気付かせる 自分が大事にされている認識 よく見る

***環境 居場所づくり** 得意なことをさせる役割

子ども同士の関係づくり
の仕掛け ネット以外の楽しいことを教える 社会とリンクしたルール作り 信頼関係



その他 たくさんの意見が出ました。

8. 自己肯定感を高めるには

みなさんが話した内容は全部大事だと思います。無条件に愛される経験（乳幼児）、ほめられる経験（小学生）、認められる経験（思春期）、それぞれ積みあがっていき、感謝される（人の役に立つ）経験が必要です。

9. グループディスカッション③

自己肯定感を高めるために児童館ができることや職員の接し方について子どもたちが持っている得意なこと、がんばりを披露する場をつくる

やる木（木の形）を貼り、班ごとに何かいいことをしたらシールをもらって貼る 可視化
さりげなく時間をかけずに人手をかける やらせにならないようにさりげなくほめる
思春期のもやもやはスタッフが言葉で整理してあげる
役割をつくる 当番、片付け、行事の準備、子ども会議、子ども企画 上級生のグループリーダー活動

地域の福祉施設との交流、地域の祭りに参加 学校との連携 便りを出して地域、保護者へ発信する

良かったことうれしかったことを話す まわりの子どもはどんな話でも必ず拍手する。



誕生会で保護者の名前の由来を書いてもらい発表する 愛されている認識 乳幼児の遊びの手伝い 成功体験を感じられる遊びを用意してほめる 自分が出来ることが新たに認識できる
いいこと 出来るようになったことなど 保護者にその日のうちに伝える

その場で大いに具体的にほめる みんなの前でほめる 名前を呼んで声掛け 異年齢の交流

その他たくさんの意見が出ました。

10. まとめ

児童館は評価とは無関係で、学校でも家庭でもなくいずれとも違う自分の顔になれます。継続的な関わりが出来て、異学年やいろんな職員と程よい距離での交流があります。職員同士の連携に



より多面的な目でみて共有し、家庭や学校と連携することが大切です。親に子どもの児童館での良い出来事をフィードバックすることで親の自信回復につながり、親の自己肯定感が上がります。スタッフも、笑顔になるために自分の健康も大切にすること、元気に子どもたちを迎え入れること、それが子どもにも間接的に関わっていきます。どんな関わりも児童の自己肯定感の高まりにつながっていきます。

参加者数

1日目50名／2日目52名

参加者の声

- ・評価フリーで継続的な関わりが出来る児童館の強みを活かして一人一人の子どもの色々な良さを見る目を養いたいです。またそれを話し合える児童館の組織づくりが大切だと思いました。
- ・自己肯定感を高めるために小さなことでも積み重ねていきたいと思います。
- ・どんな関わりも児童の自己肯定感の高まりにつながりますとの言葉に心がホッとしました。
- ・他の施設で取り組んでいる具体的な事例を聞けて良かったです。他の人の意見が聞けて良かったです。
- ・自分の肯定感を知ることが出来ました。職員の自己肯定感もみつめていきたいと思います。

担当者感想

限られた時間の中、自己肯定感とは何か・高めていくのはどうすればいいのか・児童館ではどのような取組みが出来るのかなど講師の先生の講義・グループディスカッションを交えながら行いました。自己肯定感を高めるためのたくさんの意見が出て今後の児童館での取組みのヒントになったと思います。児童館が子どもにとっての自己肯定感を育む場所になるよう努力していきたいと思います。全国からの参加者の皆様と講師の伊藤先生本当にありがとうございました。

企画委員

浅井 純一（越前市児童館・児童センター）
若宮 博子（越前市神山児童館）
関 理恵（越前市吉野児童館）
田中 純子（越前市国高児童センター）
苅部 弘美（越前市味真野児童センター）
小出 順子（越前市南中山児童館）
長谷川 幸世（越前市服間児童館）
大西 のり子（南越前町南条児童館）
木津 尚美（南越前町河野児童館）

第7分科会

地域とコラボ

～児童館が地域とともに生きるためには？～

概要

地域連携について、4つのテーマを掲げた分科会担当12児童館の事例発表の後、分科会参加者によるグループ討議を行い、それぞれの児童館の抱える地域連携の問題点や今後の地域連携のあり方について話し合いました。

講師

青井 夕貴さん

(仁愛大学人間生活学部子ども教育課 准教授)

青井 夕貴さん

分科会内容

地域連携をテーマに分科会を開催するに当たり、最初に分科会を担当する12児童館の地域連携の現状と課



題、問題点をまとめた事例発表を行いました。第7分科会を担当する福井県嶺南地域は6市町が東西に長く分布し、それぞれの市町に大小さまざまな児童館が点在します。それぞれの児童館の地域連携の取り組みをテーマごとにまとめ、事例発表を準備しました。

第1のテーマは、児童館で開催される季節の行事や、地域で活動されている個人、団体を児童館に招いて開催する地域連携イベントに注目した「イベントとしての地域連携」、第2のテーマは、行政より委託を受けた食生活改善推進員による食育活動など、地域の特色を生かした活動を紹介する「地域密着型児童館の取り組み」、第3のテーマは他の行政機関との併設であったり、立地的条件によって活動の活発でない児童館に焦点を当てた「小型児童館の現状と展望」、第4のテーマは、住宅地の中に立地する児童館の地域住民の方の意見から地域住民との関わりを取り上げた「地域の中の児童館として」でまとめ、

それぞれの児童館担当の企画委員が発表を行いました。

事例発表に続いてグループ討議を行うに当たり、講師の青井先生よりグループ討議の進め方、討議の内容に関して、全国各地からお集まりいただいた参加者の方が児童館活動に携わる中、地域連携に関する問題点や解決法などを自由に話し合っていたきたいとのアドバイスをいただきました。

グループのメンバーそれぞれが自己紹介を兼ねて、自分の携わる児童館の地域連携の現状や問題点などを出し合いました。その中から共通する課題、問題点などについて話し合いを持ってもらい、今後の取り組みのヒントやアイデアを探っていくという形で討議を行いました。



1日完結型分科会としての開催のため、1日目は4グループ、2日目は6グループに分かれてグループ討議

が行われました。北は北海道から南は九州まで全国各地からの参加者があり、それぞれの地域の特色ある地域連携の実践事例や、地域的、人材的な問題点

など非常に活発な討議が行われていました。おおむね1時間の討議時間を設けましたが、最後にグループごとに討議内容を発表するためのまとめもあり、まだまだ時間が足りていないように見受けられるグループもありました。

2日間を通しての参加者の方々の意見として、地域の中で児童館活動を行っていくに当たっての児童館の地域住民への認知度の低さや、児童館の取組みを地域に広く認知してもらうことの重要性、情報発信のあり方の方法論、また地域の人材を児童館活動に役立ててもらう際の人材を発見、紹介していただくことの難しさや、古くから児童館活動に協力いただいていた人材の高齢化問題などが多く聞かれました。



最後にグループ討議の内容発表と青井先生による講評の時間を設けました。各グループ1人ないし2人の発表者を決めて、グループ討議の内容をまとめたものを発表しました。2時間の制限時間内での事例発表、グループ討議と各グループの内容発表と、全体的に駆け足で進行した印象があるが、現在、第一線で児童館の運営に携わっておられる皆様の貴重な意見が集められたと思うので、分科会の成果を各児童館の地域連携の発展のために役立てていただければと考えます。



参加者数

1日目21名／2日目31名

参加者の声

- ・それぞれ地域と連携した事業は行っているが地域の人材の高齢化が進んでいます。新たな人材の発掘、育成のために様々な方策を講じていきたいです。
- ・地域連携を進めていくためには児童館そのものの認知度をもっと高めていく必要があります。認知度アップのためにフェイスブックの活用やチラシの配布などの活動を行っていきたいです。

担当者感想

分科会担当地域の市町の距離が遠く、企画委員も頻繁には集まらない中、事前準備にも苦心しましたが何とか分科会開催にこぎつけることができました。企画委員はじめ、講師の先生、当日発表のスタッフ、事務局、関係者すべてに感謝したいです。分科会には北海道から九州まで幅広い地域から参加がありました。運営に腐心するばかりで分科会の内容にまで配慮できなかった面もありますが、少しでも児童館活動に役立てていただけたらと思う。



企画委員

伊部 悦子（敦賀市敦賀児童館）
奥村 佳子（敦賀市松原児童館）
岡本 紗季（小浜市子ども未来課）
河合 美恵子（美浜町南市児童館）
今筋 平（若狭町福祉課）
嶋田 悠人（高浜町第一児童館）
荒木 良徳（福井県こども家族館）

第8分科会

困っているな、困ったな …保護者支援を考えよう！

概要

育児不安を抱え、こころにゆとりがなくなっている保護者へ私たちは次世代育成のためにどう支援していけばよいか。子どもに関わる人の思いや現状について話し合いました。

分科会内容

1. 分科会の流れ

(1) 1日目

[アイスブレイキング]

名前ゲーム（自己紹介）
を行い、皆さんの緊張を
ほぐしました。



[グループ討議]

自己紹介

悩みや思いを出し合いました。（模造紙、付箋
を使用する）

整理・1日目のまとめ…出てきた内容の問題点な
ど共通するところを探し整理し、その中から2日
目に話し合う課題を見つけました。

[1日目のまとめ・発表]

1日目話し合った内容のまとめを発表しました。

(2) 2日目

[アイスブレイキング]

♪ちょっとだけ体操で体をほぐす。グループ対
抗ゲームで最後に発表する順番を決めました。

[グループ討議]

1日目の課題を深めました。

児童館・児童クラブでどういった支援ができる
か探りました。

整理・まとめ…模造紙を整理し、全国に発信し
たいキャッチフレーズを考えました。

[発表]

各グループでまとめた子どもに関わるすべての
人に伝えたいキャッチフレーズを発表しました
。

2. 各グループの発表内容

金沢にちなんで加賀野
菜の名前をつけた5つの
グループに分かれて、各
グループ6～8人の人数
でグループディスカッシ
ョンをし、各グループ
『 』内のキャッチフレーズを考えまとめました。



① へた紫なすグループ

～自分を出すことが出来ない子、ゆとりのない
子への関わり方と支援～について考えました。

「子どもの心の声に」「じっくり・ゆっくり話
を聞こう！」「受けとめよう！」

「1日、1回、1秒、良いところを見つけよ
う！」「いつも子どもがまんなか！」

ゆとりのない子ども達が健やかに育っていくために
保護者に向ける言葉（児童館・児童クラブより発信）

『受けとめよう。』

いつも子どもがまんなか！』

② 金時草グループ

児童館・児童クラブは、保護者の方にとっても
一息つける場所である必要があるのではないかと
結論付けました。

『保護者のほっと♡』

ステーションになろうよ！』

③ 加賀太きゅうりグループ

1つ1つにつながってい
る悩みや困った！を丁寧
に支援していくために何
が必要かを話し合った結
果、時間をかけ、畑を整
え、種をまき、丁寧に収
穫するれんこんのように厚生員も環境を整え、
1つ1つ丁寧な支援が必要との思いをこめてキ
ャッチフレーズをつくりました。



『丁寧なれんこん支援』

④ 源助だいこんグループ

「どうしたらもっと児童館に関心を持ってもら
えるか」について話し合い

- ・まず、厚生員が相手に関心を持ち、保護者に歩み
寄ります。
- ・地域・学校の行事に参加して自分が「厚生員」で
あることを知ってもらいます。

- ・児童館とは違う子どもの様子を知ります。
- ・オープンな児童館をアピール。
- ・厚生員も心に余裕を持ちます。
- ・子どもを発信源に保護者とつながります。

などの意見からキャッチフレーズを決定!!

『心 関 線 あゆみ』

にゆとり 心を持って つながる よる

⑤ 加賀つるまめグループ

(10日のみの参加者グループ)

対応、支援として

- ・児童館や児童クラブで問題が起こった場合、原因やどう対応すれば良いか子ども自身に考えさせ、子どもの力で問題解決ができるように言葉かけをします。
- ・親や多くの人に子どもの頑張っている姿を見てもらうなど多くの目で子どもを見守ります。
- ・遊びにおける環境整備に心がけます。
- ・守らなければならないルールは子どもに言い続け、子どもから信頼される支援員になることが大切。
- ・地域や学校行事等に出かけ、親と共通の話題が持てる様に心がけることが大切。
- ・子どもの良いところも悪いところも保護者に伝え続け「子育てはお互いさま」の気持ちを保護者と共有し広めることが大切。

『子育ては、お互いさま』

子どもの力を信じ保護者に伝え続けよう!!

⑥ 加賀つるまめグループ

(11日のみの参加者グループ)

対応、支援として

- ・その子に応じた環境を整える ・保護者に児童クラブでの子どもの様子を見てもらいます。
- ・親の息抜き時間を考慮してお茶に誘い、話を聴く
- ・小学校や地域など他団体と連携します。
- ・色々な視点で子どもを見守ることで色々な子どもの姿が見えてきます。
- ・お母さんの安心を大切に「お母さんの子育てが悪いのではない」と伝えます。
- ・支援員同士協力する：その子の様子を伝えあい共通認識で子どもを見守ります。
- ・親子参加の行事などに取り組み、子どもの素敵な姿や様子など伝え、保護者が同じ悩みなど話す「しゃべり場」などを開催して子ども



理解に繋がります。

『子育ては一人じゃないよ!!』

参加者数

1日目37名/2日目38名

参加者の声

- ・全国の皆さんと同じ困りや悩みを共感できて、とても安心できたのが本音です。深く話し合えて今後、起こりうる状況を乗り越える力になるように思いました。
- ・導入からとても和やかな雰囲気でした。話し合いも意見を出しやすく、明日から子ども達のため、保護者のため、そして自分がこの仕事に誇りをもって取り組んでいくための、パワーを頂けたことに感謝します。
- ・まさに悩んでいたことで、今年 保護者と上手くいかずに失敗したところでした。皆さんからご意見を頂いて、今後につなげていきたいと思えます。



担当者感想

金沢を知っていただくため、グループ名を加賀野菜にしました。皆さん、雑談もしながら和やかに各グループ話し合っていたように感じました。2日間でどこまで話し合えるか心配しましたが、グループの人数が6~8人だったこともあり、全員が自分の思いを話し合うことが出来ました。それぞれの進行係が、1日目のまとめを2日目にしっかり繋いでいくことができ、キャッチフレーズまでまとめました。

北海道から沖縄まで全国12都道府県の方43名の参加があり、北陸を知っていただく機会になりました。

8分科会に参加してくださった皆さんありがとうございました。

企画委員

宮下 早苗、川島 紗樹、持月 ゆかり
吉井 美里、野口 俊美、三浦 啓子
東出 真粧美、山本 悠記、竹田 恭子
釜堀 美代子、広瀬 照代、松澤 栄
寺江 のりこ、中山 通子、西 よし子
宮崎 恭子、大音 恒明、小原 祥子
上野ひとみ(金沢市の児童館)

第9分科会

ちょっと気になるあの子について考えよう

概要

第15回大会で児童館ダイバーシティ宣言を行いました。子どもを取り巻く環境は時代とともに多様化しており、児童館としてどのように柔軟に取り組んでいくことができるのか。様々な課題の中から、今回は「LGBT」「貧困問題」「言葉や文化のちがい」に焦点をあて、いかに児童館として職員として関わっていくかをグループに分かれ事例を交えながら課題の理解を深めていきました。

分科会内容

1. 主旨説明

前回のえひめ大会で児童館ダイバーシティ宣言を行いました。子どもを取り巻く環境は時代とともに多様化しており、柔軟に対応できる児童館の特性を生かすために職員の資質と専門性を高めていこうということを確認いたしました。それを踏まえて多様性とは、多様化とは、どういうことかということでこの分科会では、「LGBT」「貧困問題」「言葉や文化のちがい」という課題に特化し皆さんとともに意見交換を行いたいと考えました。

2. グループ討議【1日目】

事前にアンケートをとり、4つにグループ分けをし、各グループにファシリテーターを配置しました。



グループごとで自己紹介を行った後、それぞれのグループに割り当てられたテーマに基づいて意見交換を行いました。「LGBT」

気になる点を上げて意見交換をしました。ソフト面：(1)子どもに対する名前の呼び方をどうすればいいのか。(2)子どもを取り巻く周囲の人の理解はどうなのか。(3)本人が性について意識を持つ時期や段階がそれぞれ異なるため対応の仕方が難しい。環境面：(1)男女に分かれているトイレの問題(2)更衣室の分け方について(3)書類などの男女の表記この気になる子どもたちを支えてくれる人は、民生委員、大学の心理発達専門学科、スクールカウンセラー、病院の心理発達の先生ではないかという話ができました。

「貧困問題」①

育児放棄（ネグレクト、愛情不足）、コミュニケーション・性格の問題、生活保護世帯などの子どもが気になるが、それぞれがつながり合い色んな連鎖があると考えました。子どもを取り巻く環境として、学校・行政・民生委員・児童委員など切れ目のない支援でつながること、また、学校の保健の先生が情報をつかんでいるのではないかな。ネットワークを積極的に作っていき、専門機関との連携が大事だと考えました。



「貧困問題」②

子どもたちが気になるサインを出していることに気づき受け止めることができるのが児童館職員であるということ。また、つらいということ、SOSを出せない子どもに関して、なにげない会話の糸口から、こどもの話を聞く存在に児童館職員がなれるということ。そうすることで児童館職員が、心強い存在になるのではないかな。いい意味でのおせっかい、地域のつながり、関係作りが必要だと考えました。

「言葉や文化のちがい」

文化の違いや教育の感覚の違いなどがあり地域や学校に馴染めない。それが原因で、言葉を発しない子どもも多い。警戒心が強く、自分の殻に籠りがちな子どもたちに、スポーツやゲームで交流をしたり、多国籍の食べ物を使ったパーティーな



どをしてお互いの理解を深めるようなきっかけづくりをしてみてもいいだろうか。児童館職員としては、挨拶、声掛け、楽し

い雰囲気作りを継続的にやっていくことが大事だと考えました。

3. グループ討議【2日目】

各グループごとで1日目の振り返りを行った後、改めてその内容を発表し、それぞれの課題に対し、全体で意見交換を行いました。

「LGBT」

本人に暮らしにくさや困り感があると思われるし、こうしてほしいという思いはそれぞれ違うので、児童館のガイドラインの児童館の社会的責任にも明記されているように、子ども一人ひとりの人格を尊重し、話を聞く、対応するということが児童厚生員に求められるところであると確認しました。

「貧困問題」①②

貧困対策の一環として、こども食堂や学習支援について話し合いました。設備、経費、保健所、アレルギー、偏見の目、地域の負担感など課題が多く出ましたが、実践者から実情をお話いただき、居場所づくりになること、地域の情報交換の場になること、時間はかかるが地域のネットワークが広がることなど、児童館で取り組む重要性を教えていただきました。

「言葉や文化のちがいが」

様々な方法で、コミュニケーションが取れればうまくつながっていけるという話になり、その手段として、橋渡しをしてもらえる家族に頼ることや、スマホのアプリを利用すること、また、児童館の中だけで解決しようとせず、社会資源（国際協力機構、社会福祉協議会、通訳など）を活用することも必要であり、継続的につながっていくのが大切だという話になりました。



4. まとめ

児童館は、子どものあらゆる課題に直接関わることができ、関係機関に橋渡しができる特性を持っています。児童厚生員は、専門性を高めることによって偏見をなくし、



さらに情報を発信をしていくことが大事ではないでしょうか。私たちは専門職として、子どもたちの重要な他者となって受け止め、フラットな状態で変わらぬ笑顔で、対応を普遍的に行っていきたいということを確認しました。

参加者数

1日目34名／2日目36名

参加者の声

- ・多様な考え方があり、様々な視点から相手のことを思いやることが大切だと感じました。
- ・様々な事例を聞くことができ、明日から何をすればいいか、ヒントがたくさんもらえました。
- ・皆さんの意見や考えを聞くことで、自分の課題の整理ができ、今後の参考になりました。
- ・専門性を高め、話せる人になること、伝えていく人になることが大事だと感じました。
- ・他施設、他団体との連携の大切さを感じ、また予想外の連携できる施設・機関もあり、まだまだ広がりがあると感じました。
- ・事例が多くはなかったのですが、LGBTという新たな課題をもって帰ってさらに考えたいと思います。

担当者感想

前回大会の恩返しとして分科会を担当できましたこと有難く嬉しく思います。児童館として様々な課題にどれだけ柔軟に取り組めるか、事例の少ない中、多くのご意見をいただきましたこと感謝申し上げます。

えひめ大会では「貧困問題」「妊娠期支援」と時代の流れを汲み提議しました。ふくい大会では「LGBT」「貧困問題」「言葉や文化のちがいが」を取り上げましたが、回を重ね、議論を重ね、課題への理解を深め、スキルを高めていくことに意義があります。また次回、熱い議論を交わしましょう！

企画委員

- | | |
|----|-------------------|
| 小野 | 雅之（新居浜市立川東児童センター） |
| 村上 | 敏久（今治市枝堀児童館） |
| 阿部 | 芳久（今治市伯方児童館） |
| 山下 | 洋一郎（松山市北条児童センター） |
| 黒田 | 泰士（松山市久枝児童館） |
| 敷村 | 一元（えひめこどもの城） |
| 谷本 | 舞（大洲市喜多児童館） |
| 上木 | 秀美（えひめこどもの城） |

第10分科会

発達がアンバランスな子の応援団になるために

概要

一斉指示が入らない子、思い通りにならないとパニックを起こす子、友達とのトラブルが多い子はいませんか？私たち支援者が気になる子は、実は子ども自身が一番困っているのです。子どもへの適切な援助や保護者への支援についてみんなで一緒に考えましょう。ロールプレイを交えて様々な事例を紹介します。

講師

(映像による事例発表)

・荻野 理恵さん

(児童家庭支援センターしらゆり 副センター長 臨床心理士)

・西森 啓祐さん

(児童家庭支援センターしらゆり 臨床心理士)

(ビデオレター)

・根来 あゆみさん

(神戸学びの支援センター専門相談員、特別支援教育士SV)



西森 啓祐さん

荻野 理恵さん



根来 あゆみさん

分科会内容

・支援者が気になる子どもは、実は子ども自身が一番困っています。児童館や放課後児童クラブで、



よくある保護者や子どもとのやり取りを神戸のスタッフがロールプレイや事例で紹介し、子どもへの適切な援助、そして保護者への支援について、みんなと一緒に考えました。

・1日目(ロールプレイ)

「ロールプレイ①保護者編」では、幼児が他の子に唾を吐いているが、その行動に母は謝るだけで、叱ったり、注意したりしない。唾をはかれた保護者が、これからの関係もあるので自分が言ったことは内緒で、他の方も迷惑しているので指導員から注意してほしいとお願いをしている場面

「ロールプレイ②こども編」では、放課後児童クラブでのお片づけの場面で、お片づけをせずに帰る支度をする児童を「ちゃんと」「きちんと」片付ける



ようにきつく指導するが、児童が指導員に反抗している場面

(グループワーク)

2つのロールプレイを参加者にみていただき、自分が選択した内容に分かれ、グループワークによりアプローチのポイントを出しあい、付箋、模造紙を用いて、グループごとに発表するという形をとりました。

どのグループも同じ悩みを共有し、応援団になるための方法を話し合い「環境設定」「ほめる」

「ルールを決める」「関係機関との連携」等、具体的な対応が発表されました。

・2日目(事例報告)

児童館や放課後児童クラブに在籍する発達がアンバランス、集団での指導が困難な子どもへの関わり方を学ぶ職員研修として神戸市で実施している「児童館巡回支援の取り組み」を紹介しました。



この事業の概要をパワーポイントで説明したのち、臨床心理士が児童館に出向き、助言や職員と一緒に関わり方を考え、対象の子どもへの理解を深めてい

く様子をビデオで観ていただきました。

「同じような子、うちにもいるよ」と事例の子どもと実際にかかわっている子どもさんを重ね合わせて、ビデオを観ていた参加者の方も多かったようです。

(グループワーク)

グループワークでは、応援団になるためにどんなことがあるのかを話し合い、グループで出たたくさんの中キーワードを選んで発表しました。グループの発表の中では、キーワード「こころのチームプレー」として、「一人の手」を参加者一同で合唱し、「みんなの手と手を合わせれば何かできる～」こころこころでつながる連携の大切さを発表されました。困った子ではなく改めて困っている子なんだということを再認識しました。



(ビデオレター)

講師からのビデオレターでは、「困った子ではなく、困っている子どもなんだということを理解していただきたい。関係機関や学校、家庭、そして児童館で情報交換をしながら、たくさんの応援団を作ってあげることが大切。困ったことばかりでなく、いい報告も含めて情報交換をしていただきたい。明日から迎える子どもたちの応援団になれるように、『この子たちにどうしたらいいのか』『子どもたちが笑顔になれるようにどうしたらいいのか』日々考えながら、笑顔で子どもたちを出迎えてあげて、そして1人の応援団として関わってほしい」とエールを送っていただきました。

(明日からできる宣言)

最後は1人の応援団として明日からできる宣言という形で「連携とります!」「笑顔でおかえり!」「子ども、保護者、みんなのためのいい応援団になるぞ!」等、参加者ひとりひとりが大きな声で宣言を出しあいました。宣言をすることにより応援団としての決意を新たにする機会になったと思います。

参加者数

1日目53名／2日目55名

参加者の声

- ・色々な方との出会いからパワーをいただき、明日からまた楽しく、子どもたちと向き合っていきたいと思いました。

- ・神戸のパワーがすごく知覚動考すてきたと思い、これからの指針にしたいです。有意義な時間を過ごせ、心も身体も喜んでます。この喜びを自分だけのものとせず、必ずみんなに分けていきたいです。
- ・寄り添うことの大切さ、連携の大切さ、一人ではなく、みんなで子どもの笑顔、保護者の笑顔を増やしていきたいです。
- ・どの児童館、クラブも同じような悩みを抱え解決に向けて試行錯誤しているのだと感じた。自分のクラブでも取り入れていきたいことをたくさん学んだので少しずつ取り入れていきたいです。
- ・仲間が全国にいるということが力となり、頑張れる気がします。
- ・よき応援団となれるように頑張っていきたいです。
- ・グループで意見を交換し合うことで、具体的な例や問題点に気付くことができました。

担当者感想

1日目ロールプレイでは①保護者編②こども編「児童館あるある!」実演をうなずきながら見ていただき共感できたとの多数の声をいただきました。その後、悩みや課題、疑問について活発な討議が進みました。2日目神戸の事例を「児童館巡回事業ビデオ映像視聴」後、皆のアドバイスやヒントを共有し、「応援団になるための宣言」では自分の思いを子供たちの未来に向けて新しい一歩を踏み出すことができました。「発達がアンバランスな子の応援団になるため」の方法について皆で共感、共有し連携の大切さを全国の参加者と再認識できた2日間となりました。ありがとうございました。



企画委員

六甲道児童館（金坂 尚人）
太山寺児童館（水野 宏明）
竹の台児童館（春井 義憲）
たちばな児童館（大川 晴司）
長田区社会福祉協議会（田谷 久恵）
原田児童館（中野 みゆき）
小束山児童館（岡田 純子）
魚崎児童館（山本 恵）
神戸市総合児童センター
（岩本 直子、太田 麻葵、平 栄美）

第11分科会

児童館・児童クラブのソーシャルワークに臨む ～1000本ノック事例版～

概要

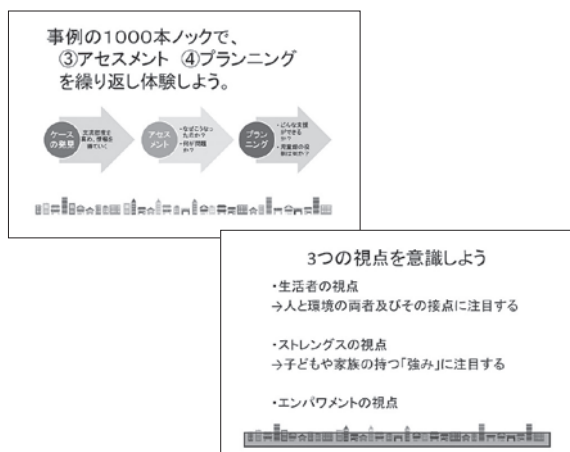
児童館（クラブ）は、多種多様な個別援助事案において、緩やかな受け止めから継続した援助・連携の役割を担っています。「児童館（クラブ）だからできること。」を主軸に、自己の掘り起こしとミッションに挑む！

分科会内容

1. ソーシャルワークとは

本分科会は、「児童館（クラブ）だからこそできる支援とは何なのか。」を深く討論することを目的として企画しました。最初に、SWの基本点を振り返る復習を、次の要点に沿いながら進めました。

- ① ソーシャルワークの実施過程
- ② 意識したい3つの視点



2. 事例検討ウォーミングアップ編

いよいよ事例の登場です。「話しやすい事例」を3本提示し、グループ討議を行いました。

事例ノック1：「他の子より遅れている？」

（クラブ参加の幼児親子。母が他児と比較し我が子の発達を心配）

事例ノック2：「産んでよかったの？」

（産後鬱気味で精神不安定になっている母の相談事案）

事例ノック3：「お腹へった！」

（いつもお腹を空かしている児童クラブ女兒。生活課題が懸念される事案）

「母の揺らぎ、苦悩」

「少し心配な小学生」が登場する事例です。グループ討議では、以下のような意見が出ました。（抜粋）

○援助対象者の来館（所）

が途絶えぬよう「足が向
きやすい環境、話すことができる環境」を守り



ぬくことが大切

○児童館ならではの「関係性の構築」や「身の寄せ所」を機能として備えながら緩やかな見守り手として在ることの重要性

3. 事例検討じっくり編

事例ノック4：「居場所があってよかった」

1日目の最終ノック。

20分間のグループ討議を実施。事例は、児童館には足を運びながらも、登校を渋る女子中学生と児童館職員のトーク場面を再現。参加者の皆さんも



次第に和み始め、軽やかな討議が滑り出しました。各々のグループから、様々な視点にて多様な意見が出ました。（抜粋）

○中学校との連携は不可欠だが、熟考が必要だ。

児童を傷つけてしまう可能性がある。

○「いつでもwelcome」を伝え、来館を否定しない。

○周囲の大人が、児童の「最善の利益」を共有し、重んじることが大切

○児童が、自身の今後を見通せるような援助が必要

初日は、会場の雰囲気も温まったところで終了。

終わりに、「事例ノック5」を宿題提示し、2日目へ繋ぎました。

（2日目）

事例ノック5：「子どものことが嫌い」

前日に宿題提示した事例を刻み込みながら、討議へと移りました。本事例は、「子どもとの生活に限界を感じる。」とメール送信してきた母親への支援を問うものでした。グループ討議では、「他機関との目線を合わせた支援」や「行政・福祉サービスのマネジメントの必要性」など、『連携』を軸にいた意見が多く出されました。

4. 悩みのキャッチボール

ここより趣向を変更し「京都スタッフの悩み」

（模擬事例）を皆さんに投げかけ、全員で意見を交し合いました。

事例ノック6：「おにぎり」

（空腹を訴える児童におにぎりを提供し続ける

児童館とはいかがなものか)

事例ノック7:「どっちを守る?」

(利用児童OBと小学生の間のトラブルを巡って、支援の方向性に悩む)

この2事例では、各々の現場にて類似した事例もあるようで、熱く議論が深まりました。この2例の「悩み」を通し、「児童館(クラブ)のあるべき姿勢、執るべき支援の方向性」について様々な意見が交わされました。「自立支援を主軸に」「児童の最善の利益を根底に」「連携から始める地域支援の可能性」等のキーワードを基に、私たちのミッションを考える機会となりました。



5. 児童館のソーシャルワークとは

最後に、本分科会のねらいであった「児童館(クラブ)だからこそできる支援とは」に議論を戻し、各グループで次のキーワードについて討議を行いました。

「児童館のソーシャルワークとは〇〇である。」

～グループ発表～

八坂 「ありのままにいられる場所」建物かもしれない。人かもしれない。それは子どもが感じる事。

清水 「子どもを中心に全世代を照らす太陽」いつも人々を照らし輝いていたい児童館である。

太秦 「電線」発電所もあれば電線もある。家庭に繋ぐ線でもある。スイッチつけると明るくなる機能。

鞍馬 「一緒に進むこと。ひとまずゴールに向かって。」事例に関わることで共に生きていくこと。

京極 「見た目じゃない! 4Dでみるスキマ産業」事情を、裏から横から縦から眺め、支援を。

賀茂 「寄り添いは七変化。」寄り添いはひとつではない。多様 多機能に寄り添うことが必要

室町 「地域の全ての子どものために児童館の有する多機能性・地域性を活かして行う援助技術」

参加者数

1日目43名/2日目47名



参加者の声

- ・スピーディでテンポ良く、かつ話合いも深められとても実りのある分科会に参加でき幸せでした!
- ・自分一人では思いつかないようなお話も聞けて、もっともっと頑張ろうという気になりました。また、児童クラブのあり方についても考えさせられました。
- ・参加して非常に醍醐味のある内容で今も消化しきれずにいます。ふだん自分たちが当たり前に行っていることを、周囲に分かってもらうようにしているかが問われていると常々思っています。今回の分科会の未消化を少しずつ消化して、現場にフィードバックしていく作業を続けたいと思います。
- ・事例って似たようなものがあっても、人のかかわりだからすべて違う答えや対応になるってところが、大変であり面白くもありますね。ますますたくさんの経験とケースを重ねていきたいと思いました。

担当者感想

本分科会の企画にあたり、TEAM 京都では、企画会議を12回重ねて参りました。その経過の中で、大変深い学びや気づきを頂きました。そして、各々にとり、児童館が深く、深く「大切」になってきました。

随分悩みながら、辿り着いた分科会でしたが、参加者の皆様に、大切なキーワードをたくさん生み出していただき、まさに児童館(クラブ)の「在り方」「有り様」の掘り起こしを語る分科会に仕上げて頂きました。

TEAM 京都一同、心より感謝申し上げます。参加者の皆さん、素敵なメッセージメールを頂き、ありがとうございました。



企画委員

「TEAM 京都」

- | | |
|----------|---------------------------|
| 三浦 正人 | (京都市御室児童館) |
| 池田 英郎 | (社会福祉法人京都福祉サービス協会塔南の園児童館) |
| 山崎 真由美 | (京都市西賀茂児童館) |
| 小倉 真由美 | (京都社会福祉協会新林児童館) |
| 野田 雅子 | (京都市大宮西野山児童館) |
| 谷山 和也 | (公益社団法人京都市児童館学童連盟) |
| 富田 泰行 | (京都市学童保育所管理委員会) |
| 高尾 順子 | (社会福祉法人上総福祉会大原野児童館) |
| 木戸 玲子 | (京都市修徳児童館) |
| 波多野 里美 | (社会福祉法人健光園ももやま児童館) |
| (当日スタッフ) | |
| 斉藤 美季 | (公益財団法人 さっぽろ青少年女性協会) |